

「探検試論」 第四部

小野龍弥

探検部は12周年を迎え、私の探検試論も第一部より数えて早や10年になりました。

顧みる10年の歳月は、遠く遙かにたゆとう大波が浜辺に打ち砕けるがごとく、私自身の生活は今もつて波乱万丈の日々でした。でもこの大海の中に私という小舟は翻弄されながらも沈まずに目的地を目指しているようです。では探検部というもう少し大きい船はどうでしょうか。これもまた沈むことなくかなりの速力で航行していますが、行く手に大学紛争という三角波が湧き立ち、文化会脱退という一時進路を迂回させる他なかつたようです。今ここで私達は正しく事実を判断し正しく行動し、より秀れた探検をなさんとする決意がひとりひとりの自覚としてないならば、関大探検丸は漂う木屑の一片になることでしよう。

そんな渦中にあつて「踏査」の出版がなされることは喜ばしいことであり、ここにいたらぬ筆ながら、これからの探検部について考えてみたいと思います。

皆さんに何らかの批判が起るならば、それは私の期待するところであり、関大探検の明日にとつて望ましいことに違いありません。これまで探検部はこれらの試論に基づいた活動をしてきました。ここに踏査第一号よりの探検試論を要約してふりかえることも、若い現役諸君にとつて興味あることと思います。

昭和36年 踏査 1号

「探検試論 第一部」

部が創立されて以来の主流であつた離島調査に見られる学術調査的活動（それは高度な学問的要素に裏付けされていなければならないのに）における学究の甘さを批判し、地理的探検こそ関大探検のとるべき道であるとして冒険的探検への方向を示した。

既に35年秋に冒険的探検にそなえて技術研究会が発足しており、新見市の洞窟群調査、知床半島遠征等への活動は現在に比しても秀れたものであつた。なお重兼OBによる試論への批判としての「学生探検の意義」が併せて掲載された。

昭和37年 踏査 2号

「組織改革試論」

ここにおいて技術研究会の意図する山岳、洞窟調査等の部員の個性を尊重した各パートの個別合宿の確立を提案し、今日の部の出発点となした。「カヌーをやりたい者が登山靴やビッケルを買ひアルプスへつれてゆかれたばかりに、かねてより欲しいゴムボートすら買はず練習する時間もない……吾が部も創立4年を迎え行動において質的に向上してゆかねばならないとき、それにブレーキとなる合宿形態は既に時代遅れである。（文中抜萃）」

この秋の総会において各パート別合宿の確立が可決され技術研究会はその初期の目的を果たした。このとき既に探検委員会制度も発足したが、組織が若いこともあつてこれはまもなく有名無実となつた。この2号には重兼OBの批判への反論とし

て「私の立場」を併載し、積極的に部の指導者たらんとすることを宣言した。

昭和39年 踏査 3号

「探検試論 第二部」

前号の組織改革によつて生れた学術調査派（離島班）地理的探検派（技術研究会）の各自の活動に対して方向づけをなした。

昭和40年 踏査 4号

この間部内に技術研究会を母体として洞窟班、ボート班が生れ、小儀君という異才の入部によつて海底班が生れ、パート制は之の効果を發揮し、探検部活動はブルーアンデス遠征を頂点として愈々充実したものとなつた。この号では私も部についての論説は古谷OBの「探検雑感」に譲り、私の専門とする登山における報告「黒部」を掲載した。

昭和41年 踏査 5号

「組織再改革試論」

各パートが充実した組織を形成し終えた時点に将来の探検部像を示した。「試論の言わんとするところは、来たるべき日におけるクラブの解散と再組織である。そして再組織された暁の関大探検は関大探検連盟という名称の下に、潜水部、洞窟部といったクラブを包含し、更に連盟は学内的に体育会、文化会等と同等の地位にある……。〔文中抜萃〕」ということであり、これは一方向を提言したものであり、この時には勿論時期尚早であつて大きな議論は生れなかつた。

「探検試論 第三部」

これは異例の別冊として発行された。第三部においては主として探検部の精神について考え、探検とは未来においてすら冒険を伴う地理的探検であることを再確認し、社会的制約と色々な欲望や誘惑からの断念を経て得られた自由が探検を向上させるとし、技研につづく各パートの科学的探検

への方向を示唆し、更には私自身の再出発を宣言した。

それ以後部が10周年を迎えて間もなく、20周年に向つてより高度な且つ大きな探検を目指す為の各パート間OBと現役間の意志の流通を図る目的をもつて探検委員会の再発足を要請し、可決設立され今日に至つている。

以上によつて現役諸君も探検部の意図して来たものが奈辺にあつたのか理解できたことと思いません。皆さんが現在在席している探検部とは過去12年前より存続し、更に未来永劫に人類の生存する限り探検は存在し関西大学探検部もまた同じでなければなりません。皆さん方は現役陣だけが探検部であるとの錯覚をしてはなりません。現役とは四年間だけ探検部を預つていたのであつて次代の者により秀れた部として譲つて行く責任と、安心して任せられる後継者の養成を義務としてもつていのです。現役独断による文化会脱退という行為が、結果がどう出ようとも大変な誤りであつたことは、今さら言うに及ばないほど反響と批判が起つたのも当然と言えましょう。

さて、我が部は冒険を伴う地理的探検を目指していることが、12年の歴史において明白にされ、又関西大学と言う風土には自然科学系の学部がなく、学術調査の指向は低迷している内にも、洞窟班が青海千里洞に於ける成果として秀れた調査報告を発行していることは、私達関西大学を母体として活動する者の基本型であるということが言えましょう。それでもなお学術調査とか言う人は、探検部以外に学研部という組織がありラテンアメリカ研究会等が秀れた活動をしていますから、そちらへ入部するのが自分を生かす道だと思います。又私達過去に於いて何ら制約を受けませんでした。自分のやりたい活動をやる為に新しい計画やパートを作ることに於いてその意図が、途中でみ消

されたことはありません。その人自身に確固とした信念と情熱があれば常に道は開かれてきました。探検部における探検という原則の中で自分のやりたいことをやれないような人は結局未踏未知の世界に挑戦するような行為には不適格な人であり即刻退部するべきでありましょう。各パートが共に活動が充実化してこれたということ、例えば青海千里洞の究明という信念と情熱に燃えた人達が何年間もひとつになつてやつたからできたことであり、その裏付は何であつたかを忘れてはなりません。それは技術です。

秀れた技術があるということは(それは健全なる精神と肉体にのみ宿ります)基本となつて探検はなし得るのであり、口先の理屈だけで探検できたという事実はこの世にあり得ません。毎年1~2年の現役諸君が現在の部のあり方を否定し非難し、何とかそれを打破しようとしてできないのは1~2年における技術、経験、知識が未熟であるということに他なりません。又パート制の中に於ける精神的肉体的制約を受ける苦痛に耐え切れない故の(青年初期の特性ともいふべき)反撥であり、それに耐えてより優秀な技術をもちえた者が3~4年になつて、やりたいことをやつて来たのであり、単なる不平不満分子は結果として情熱の浪費をしたにすぎず、残念なことにそんな人が上級部員になつても部の統制もとれないで1~2年に迎合して部の民主化などと自らをいつわり、厳肅な部の運営上の支障となるような人さえ生まれる恐れとなるのです。

ここで事をもう一度明白にするなら、現役部員の中に部の制度に欠陥があるからやりたいこともやれないと考えている人がいるなら、それはその人自身に欠陥があるのだと反省し、自覚してもらいたいものです。自らが自らの道を自らの足で歩くことを忘れるな

らば、次の一步に対する期待も意欲も勇気もなくただ組織を軽視して自らがあたかも正道であるかのような独善と妄想の世界に自らを押し込める他には生きている価値もなくなることでしよう。

次に、私達が探検委員会を結成した第一の目的は20周年に向つて活動をより高度なものにレベルアップすることでした。これまで無制限であつた海外遠征もその為に原則として年一回と定められ且つ海外遠征は出発予定の少なくとも6ヶ月前国内は3ヶ月前に計画書の提出を履行し、この準備期間中に計画をよく検討し隊員を選び資金を調達しトレーニングをなし、より社会に貢献しうる探検となるよう努力するのです。本論から離れますが、ここで各パート別に今後の活動の方向点を探つて見ましょう。

〈技術研究会〉 1. 事故を潰滅すること。

2. 第2次南米遠征隊を出すこと。 3. 第3次遠征を研究すること。

〈洞窟班〉 1. マイコミ平に結論を出すこと。

2. 堅穴技術装備を磨くこと。 3. 先進外国隊との協同探検を組織すること。

〈ボート班〉 1. 黒部川を解決すること。

2. ゴムボート以外の艇技術をマスターすること。 3. 海外遠征を計画すること。

〈潜水班〉 1. 高深度潜水の技術装備科学的知識を向上させること。 2. 映画撮影技術機具をマスターすること。 3. 洞穴潜水、海外遠征等を系統的長期的計画によつてなすこと。

〈調査班〉 1. 他の4パートにないユニークな活動を見出してゆくこと。 2. 1パートとしての組織の強化を計ること。 3. 無人島生活、大陸横断等現代が失ひゆくものを保守すること。

今後2~3年間に部として派遣すると考えられる海外遠征隊は、1. カリマンタン 2. 南米の山 3. 南洋の海が立候補している程度で

現1～2年部員は奮気してもらいたいと思います。然し部はレジャーの為にあるのではないので卒業旅行としての遠征など一層許されないことも充分心して下さい。更に部として研究を計つてゆくべきことは、

- (1) 遭難対策規約に基づく事故の絶無を徹底させること。
- (2) 技術装備体力知識等の科学的管理を実現すること。
- (3) 今後の探検活動をより高度なものとして推進すること。
- (4) 大学内に於ける立場を明確にすること。

これらの意図によつて各パートが互いに切磋琢磨してゆくならば今後の総合遠征隊は国際的檣舞台での活躍もまた夢ではありません。

本論に戻つて、今年7月アポロ11号が月に着陸し今後宇宙探検は、未到への人間本能として世代から世代へと受け継がれてゆくことでしようが宇宙の探検と開発がより大きく育つために、人類はまずもつて自らのゆりかごである地球をより住みよいより豊かな平和な基地にする努力をおこたつてはなりません。アポロ11号の発射の瞬間に宇宙センター入口のデモ隊の中に故マーチン・ルーサー・キング師の後継者となつた南部キリスト教指導会議議長である、ラルフ・アバナシー牧師がデモの目的を失念して、「アメリカには多くの飢えた人達がいるという事実を本当に忘れてしまいました。私もアポロを誇りに思うアメリカ人の一人だつたのです」と語り、イスラエルのユーモア作家のエフライム・キシヨン氏は「歴史のこの瞬間、私たちはその属する国家、民族、宗教を忘れ、人類の一員となつた」と書き、ガーナの人口三千人の町、ドドアの酋長の一人、ナガイ・カッサセ世は「もう一つ心配なのは月の大きさだ、私の目にうつる月は小さすぎて月着陸船がおりられるとは思えない」と言い、アメリカがソ連にルナ15号の正確な情報を求めたところ、ソ連はただ

ちに返事を送つてきたのでした。(リーダーズ・ダイジェストより)

とにかくアポロ11号による宇宙探検の輝かしき第一歩は、全世界の耳目を一つにしてしまいましたが、その興奮も覚めてみれば、地球上にはどんなに多くの問題があることでしよう。人種間の争いがあり、未開地があり、貧困があり、戦争があり、どれひとつとつてみても容易な解決もなく、おそらく宇宙から見た本当の地球は真黒いものだと思うのです。

探検の信奉者である私達は宇宙探検時代に生きる者として、まず平和の信奉者でなければなりません。私達は地球のあらゆる地点を知りたいと願っています。然し真の探検者であるならば個人の欲望としての探検でなく、より住みよい地球にする為の努力として探検されなければなりません。美しいものを美しいものとして賛美するのに国家や民族や宗教の垣根はありません。又、未知なるものはそれに挑戦し開拓する人間の本質に差はありません。私達は未知の美しい地球を対象とし、ただひたすら人間として人間愛のための探検を行なつてゆきたいと思います。このようなテーマの下で、私達が仲間として集結し努力してゆくならば、大学紛争に動揺するような部員などありえないのではないのでしょうか。私はこゝで未知の美しい地球を対象として人間愛の探検を指向することを誓います。

以上で探検試論第四部を終わります。より秀れた探検部を形成してゆくためには、幾多の問題が存在し将来を予測できないこともまたありますが、真の探検を志す人達が集つていなければ、どのような苦難に遭遇してもそれを乗り越えてゆくことには何の支障もありません。現役諸君の健闘に期待します。

(探検委員会委員長)